


 巻頭言

科学情報とコミュニケーション

島根大学 生物資源科学部 生命科学科 しお塩 つき月 たか孝 ひろ博



昨年来の新型コロナウイルス感染症の発生と世界規模の拡大が報道される様子は、科学情報について再考する機会を与えてくれた。ウイルスの特徴、変異株やワクチンの作用・効果・副反応、感染経路・感染者数の増減予測等、多様な情報が異なる専門性レベルで発信されており、受け手の知識や捉え方は様々である。それ以前から、農薬、食品添加物、ゲノム編集作物、放射能汚染や5G等々、健康リスクに関する情報が飛び交い、不安を煽る報道には科学的に根拠の乏しいものや疑問を呈するものは少なくない。情報の種類や質が大きく変化している今、改めて科学的な情報提供とコミュニケーションへの向き合い方を考える必要がある。

情報の受け手として、未知のリスクに対する不安は生物として本能的なもので、特に目に見えないものほど心配の度合いは大きい。そして不安、心配の大きさに比例して、多くの情報や世評を検索するようになる。その情報源としてはテレビの影響力が最も大きく、新聞・週刊誌に加えて、ウェブ情報の割合がインターネットの整備とプラットフォームの拡大により若年層ほど増えてきた。しかし総務省の調査によれば、単にインターネットへの代替が進んでいるのではなく、マスメディアを見ながらインターネットで検索する並行利用の形態へ移行しているとされる。テレビはリアルタイムであるのに対し、ウェブ情報は長期的に残る。情報に触れる頻度が高いほど信じるようになり、単純接触効果で多くを見聞きすればするほど不安は膨らむ。そして、危険性があるかないか、ゼロか1か等単純化した情報ほど伝わりやすく浸透する。一般に、真偽性・正確性より有名人や多数意見の方を受け入れたり、インターネット記事やSNS・ブログ・口コミから、自分の考えに近いもの、信じたいものを探し出して、信念を強くしたりする傾向がある。

情報発信の様態も変化してきた。ウェブでは確信的意図を持つ反対派が相関関係と因果関係や事実と予測を不明瞭にし、リスクを過大に唱え、フェイクニュースや巧みなデマ情報を流すことも行われている。すると、善意のインフルエンサーがそれを拡散し、多数に定着するという現象が起こる。またアフィリエイトシステムにより、サイトやブログへのアクセス数を稼ぐため、奇をて

らった注目を引くためだけの情報が発信されることも多い。それに対し、しっかりとした科学的根拠に基づく情報提供では、正確性を期すと難解な表現となり、かつ、様々な可能性から「絶対」と言い切らない曖昧さが残る表現となる。特に生物分野では、個体差のばらつきや環境条件等による変動要因も大きいいため、正しく発信された情報ほど伝わりにくい。本来はデータに基づいて判断しているはずの自然科学系研究者ですら、ヒトへの健康影響に関することになると客観性や冷静さを欠くような一面も感じられる。

これら両者の良好なコミュニケーションを図るために発信者は、それらの無秩序な情報氾濫と、受け手の心理や姿勢をよく把握する必要がある。受信者が不特定多数で双方向性を持つ場合は、できるだけ感じていることに耳を傾け、捉え方の多様性を認め、平易な表現を用いて順序立てて説明すること、しかし同時にくどくならないように心がける。教えてやるといった上から目線や、説得を試みようとする姿勢を避け、一方的に理論ばかりを優先させないようにして、「なるほど」と共感できるきっかけを作ることが肝要である。対象が絞られるなら、受信者特性に合わせて、知り得たことで満足感が得られるような内容を提供する。それらに加えて、社会が不安を抱える課題に対しては、科学リテラシーの大切さに気付いてもらえるように、分野や対象を超えて横断的に連携活動して、アピールする機会を増やすのも有効と考える。

相互理解のコミュニケーションの構築は容易ではない。何かの事件や事故等で健康影響が話題に上る都度、それぞれの専門家の立場から正確な情報を適切に発信する努力を続けることが、それにかかわる者の責務である。一度できあがった思い込みを解くことは難しいけれど、地道に科学的根拠に基づいた情報提供を繰り返し、発信元の信用を得られるように積み重ねていくほかない。情報が溢れる中であっても、惑わされることなく正しく知ることの大きさが認識される社会へ成長していくことを心から願う。

(日本農薬学会会長)